

花川病院

症 例 概 要 患者：女性 70歳代

病名：脳梗塞、高次機能障害

入院期間：2022年A月B日～C月D日

経過：F町在住。脳梗塞でO市の脳外科病院入院。入院3日目梗塞巣拡大し全介助の状態となり、意識障害やせん妄、不穏言動がありベッドサイドに転倒、四肢抑制となった。ご本人、ご家族が身体抑制に不満をもち入院11日目に自宅へ強行退院した。その後、当院へ入院。入院時、夜間せん妄、暴言、暴力などあったが傾聴し信頼関係を築き、自分らしさを取り戻し回復、4点杖歩行となり自宅退院となった。

内 容

F町の団地で長女と2人暮らし。2022年E月G日左麻痺に気づきO市の脳外科へ入院した。入院後脳梗塞巣が拡大し左麻痺高度となり、座位保持困難、全介助の状態となった。意識障害、せん妄、不穏言動がありベッドサイドに転倒、事故防止のために四肢抑制となった。抑制されたことにご本人、ご家族が不満をもたれ、治療途中であったがE月H日強行に自宅へ退院した。退院後、左麻痺が強く動けない、昼夜問わずトイレ頻回、子供3人交代で介護をしたが、介護負担が大きく、A月B日抑制をしない当院へ入院した。

入院時、移乗は全介助、バランスが不安定、排尿に対する訴えが強く、「トイレに行かないとでない、排尿後も残っている気がする」と頻回にトイレに通う状態でした。頻尿で不眠の状態が続き、昼夜逆転傾向となり、暴言、暴力行為があり転倒もありました。チームカンファレンスで排尿に着目し、尿カテーテル挿入を試み、睡眠時間の確保や生活リズムを整えるようなケアを行いました。挿入後は違和感の訴えがあったが、抜去日をご本人へ明確に伝え、ご本人の意見を尊重し、信頼関係を築く事に努めました。スムーズな移動、下衣の着脱ができるようリハビリ強化に努めた。入院1か月頃からサークル歩行でのトイレ誘導、下衣操作見守りで行えるようになり、夜間ポータブルトイレ自立となりました。自立できた事により、さらに安定した精神状態につながり、表情も和らぎました。

また、入院時から今までどのように家庭や社会参加の役割を担って行ってきたか傾聴した。早くに夫を亡くし、女手で3人の子育てをしてきたこと、地域の活性にも関心を寄せ、意見を伝える活動をしてきたこと、今回入院時に、応援してくれるご家族や近所の仲間によくなった姿をみせたいから頑張っている

ことなどを話され、ご自身の生活を振り返り表出することで、自分らしさを取り戻し、スタッフとの信頼関係が構築できていったと考える。

「退院時にはこんなによくなると思っていなかった、お友達が作ってくれた、上下おそろいのお気に入りの作務衣を着て、よくなった姿をみんなに見せられる」と笑顔で退院された。

急性期病院で四肢抑制をされていた情報はあったが、スタッフはチームで「親身な対応」に努め、2か月で自分らしさを取り戻し、仲間の待つ地域、ご自宅へ退院できた。

FIM 入院時 30/91 28/35 計58/126

退院時 62/91 31/35 計93/126